

現行民法典を創った人びと（17）査定委員14・15・16：三浦安・河島醇・神鞭知常、外伝13：五大法律学校（その3）専修大学

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/18929>

出版情報：法学セミナー．55（9），pp.52-55，2010-09-01．NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：



現行民法典を創った人びと [17]

九州大学教授 七戸克彦

法学セミナー
2010/09/no.669

1 | 潮見佳男(1959-)と三浦安を生んだ伊予・西条は、紀州藩の支藩(紀州徳川家の筋が絶えた場合の備え)。西条藩大目付・小川武貴の長庶子として文政12年8月に生まれた彼の幼名は光太郎、旧名は休太郎で、維新後に諱である安を名乗るようになる¹⁾。

7、8歳の頃より千種善左衛門に養育され、嘉永3年21歳で江戸に出て藩儒・山井璞輔と安井息軒に学び、また昌平黌に入って修学すること5年、安政2年三浦家の養子となり卓子と結婚、翌安政3年より8年間郡奉行として民政を担当。その後、元治元年末に宗藩・紀州藩より請われて同藩に転籍し、紀州家付家老(新宮城主)水野忠央の懐刀として、將軍継嗣問題で一橋派を斥け、紀州藩主・慶福の擁立に成功(14代將軍家茂)。その後は紀州藩の周旋方として京都に出張し、公武合体派の中川宮朝彦親王の信任を得て佐幕運動に暗躍、慶応3年天満屋事件で関甚之助・三宅栄充^{よしみつ}ら他の周旋方とともに陸奥宗光ら海援隊に襲撃され負傷、さらに明治元年には維新政府により禁錮5年を言い渡されるが、翌2年に免除、江戸仕込みの漢学の素養で私塾を開き関直彦らを教える。

2 | 明治4年1月7日和歌山藩少参事として新政府に仕えることとなり、同年7月14日の廃藩置県後は翌5年1月20日に大蔵省七等出仕。なお、2月23日和歌山県出張、権参事心得を命ぜられているが²⁾、同年三浦は元同僚・三宅栄充の12歳になる一人息子・米吉を連れて上京しているから³⁾、東京と和歌山を往復する生活だったのだろう。翌6年2月には左院四等議官、7年6月地方官会議御用掛、8年5月内務省五等出仕、翌9年2月内務権大丞、5月図書局長、10年10月修史館監事を経て、15年5月元老院議官に昇る。その後は、21年2月高等法院陪席裁判官、23年6月帝室制度取調委員、同年の議會開設により、10月10日の元老院廃止に先立ち9月29日貴族院勅撰議員。

3 | 法典調査会では、小中村清矩(1821年生まれ)に次ぐ長老であり(3位は細川潤次郎(1834年)、4位は松方正義(1835年)、5位は中村元嘉(1838年)、以下6位・渋沢栄一(1840年)、7位・伊藤博文(1841年)、8位・尾崎三

良(1842年)、9位・村田保(1843年)、10位・千家尊福(1845年))、松方内閣時代の明治29~30年には清浦奎吾副総裁欠席の際に(なお、松方総裁は1度も出席せず)最長老として(小中村は28年に死去)議長を務めている⁴⁾。

4 | その間、明治26年10月26日より東京府知事となり、東京市不正鉄管納入事件(日本鑄鉄会社が検査不合格の水道管を合格品と偽装して東京市に納入した事件)で、重役らを詐欺罪で告訴。弁護人には岡村輝彦・山田喜之助・江木衷・磯部四郎ら、第1審(東京地方裁判所)の陪席判事には洋画家の床次正精、控訴審(東京控訴院)の陪席判事には日本画家の川村雨谷とオールスターキャストであるが、三浦知事自身も、明治28年12月9日東京市会で不信任案採択、翌29年3月12日の再度

の不信任議決を受けて14日辞職。同事件を契機に、市制特例(東京・京都・大阪に限り府知事が市長を兼任する特例)の制度は明治31年に廃止され、一般市制が施行される。

5 | 一方、三浦は、上記東京府知事辞職日に宮中顧問官に転ずる。明治43年12月11日東京市赤坂区青山町の自邸にて脳溢血により死去。享年83歳。同日特旨をもって従二位に進み、16日天皇は侍従・河鱒公篤を勅使として差し遣わし白絹2匹を下賜した。

〔査定委員⑭〕



三浦 安

みうら・やすし (1829-1910)

『日本の歴代知事 (第1巻)』
(歴代知事編纂会、1980年)より

1) 三浦の履歴については、松本徳太郎(編纂)『明治宝鑑(全)』(明治25年)115頁、城戸八洲(編著)『伊予偉人録』(愛媛県文化協会、1977年)311頁、日本歴史学会(編)『明治維新人名辞典』(吉川弘文館、1981年)947頁、西条史談会(編)『西条人物列伝』西条史談9・10合併号(1986年)96頁。ただし、幕末以前の記述には相違箇所がある。

2) 我部政男=広瀬順皓(編)『国立公文書館所蔵・勅奏任官履歴原書(下巻)』(柏書房、1995年)568頁。

3) 三田商業研究会(編)『慶応義塾出身名流列伝』(実業之世界社、1909年)827頁「三宅米吉」、築山治三郎『三宅米吉——その人と学問』(図書文化、1983年)2頁。なお、三宅米吉は、歴史学・考古学の大家(「漢委奴国王」の金印を「漢の倭の奴の国王」と読んだ人)で、東京文理科大学(現・筑波大学)初代学長。

4) 第200回委員会(明治29年12月11日。清浦と途中交替)、第14回整理会(明治30年6月14日)。第19回整理会(明治30年7月23日)。

1 | 河島醇は、弘化4年3月6日薩摩藩士・河島新五郎長寛の長男として鹿児島城下長田町に生まれた。安政元年8歳で藩校・造士館に学び、戊辰戦争に従軍。明治2年藩の選抜で昌平学校に入るが、川田剛の塾江塾に転ずる。大久保利通の推薦で東伏見宮彰仁親王の英国留学の随員として明治3年渡欧した先で、留学先を普仏戦争に勝利したドイツに変更、ベルリンに学ぶ。

明治7年3月帰朝後は、8月外務省八等出仕、翌8年9月外務省一等書記生（交際官試補）に任ぜられて再び渡欧しドイツ公使館に勤務、11年1月ロシア公使館勤務から、翌12年3月オーストリア公使館勤務。

2 | 明治14年8月帰国して、10月大蔵権大書記官兼外務権大書記官、翌11月には太政官に設置されたばかりの参事院の員外議官補を兼任、翌明治15年3月参事院議長・伊藤博文の欧州憲法調査に随行、他の随員は、伊東巳代治（参事院議官補）、

西園寺公望（同）、岩倉具定（同）、広橋賢光（同）、山崎直胤（太政官大書記官）、平田東助（大蔵少書記官兼太政官少書記官）、吉田正春（外務少書記官）、三好退蔵（大審院判事）ら⁵⁾。一行は、まずベルリン大学のグナイストを訪ねたが（平田東助は明治6年グナイストに学んでいる）、グナイストの態度を無礼と河島は激怒、直ちに

ウィーン大学のシュタインに就くことを提案（河島はオーストリア公使館時代シュタインに学んだ）。結局伊藤博文は2か月半グナイストの講義を受けた後ウィーンに移るのであるが（後の「シュタイン詣」の発端）、短気で直情径行型の河島は、帰路の船中でのトランプ遊びの際にも、いきなり伊東巳代治の頭を殴って大喧嘩になっている（いかさまをしたと誤解したらしい）。

3 | 帰国の翌年（明治17年）9月大蔵大書記官となるも、松方正義率いるデフレ政策の大蔵省と、大久保利通の衣鉢を継ぐ殖産興業政策の農商務省との抗争の中で、大久保直系の河島は松方大蔵卿より忌避され、明治18年3月より22年5月までの長きにわたり海外に追いやられる。帰国から10か月後の明治23年3月に官を辞し、7月の第1回総選挙に当選し衆議院議員。薩派の申し子であるにもかかわらず、藩閥打破と民党合同を主張して、同年9月結成の立憲自由党の幹事となり、同党分裂の後は明治25年同盟倶楽部、27年立憲革新

党と第三民党を組織。因縁深き松方の（第1次）内閣のみならず、憲法調査でシュタインを紹介した伊藤の（第2次）内閣でも河島の獅子吼は止まず、第6議会では彼の野次に伊藤首相が演説を止めて「河島サンハ大分御心易カッタガエライ御攻撃ジヤナ」と言い返す事態まで生じている⁶⁾。

4 | だが、日清戦争後の28年には立憲革新党も離党して無所属となり、第9議会で政府が戦後経営の一環として提出した日本勧業銀行法・農工銀行法の積極的推進論者として、これに反対する自由主義派の経済学者・田口卯吉議員との論戦を制して法案成立へと導き、再び松方に政権が代わった後の明治29年12月、田尻稻次郎（大蔵次官）・金子堅太郎（農商務次官）・梅謙次郎（法科大学教授）・渋沢栄一（第一銀行頭取）ら13名からなる勧業銀行の設立委員の一人に選ばれ、翌30年

6月には初代総裁をも任命されて、衆議院議員を辞職。松方と河島のこじれた関係に、薩派の融和を図る西郷従道が仲裁に入ったらしい。しかし、二人の関係は改善せず、第2次山県有朋内閣・松方蔵相時代の明治32年総裁辞職に追い込まれる。

5 | このとき彼に滋賀県知事のポストを与え救助したのも当時内務大臣であった西郷従道であり、以降彼は

地方長官に後半生を捧げた。明治35年には福岡県知事に転じ、貴族院議員（兼任）となった36年には京都帝国大学の医学部分校（九州大学医学部の前身）の福岡誘致に成功するが、明治39年一転して今度は北海道庁長官。時の内務大臣・原敬が、不正の噂の絶えない前長官・園田安賢の後任として、剛直で清廉な河島に白羽の矢を立てたものであるが、北海道の酷寒は彼の心臓を蝕み、明治44年4月27日逝去。享年64歳。かくして長州が桂太郎（河島と同年でドイツ留学も同時期）への世代交代を成功させたのに対し、薩摩は有能な後継者を生かせずに終わった。

5) このほか、華族の相良頼紹・戸田氏共が私費で参加、また、明治14年度文部省派遣留学生（都筑馨六ら8名）のうち木場貞長・末岡精一が同船した。瀧井一博「伊藤博文滞欧憲法調査の考察」人文学報（京大）80号（1997年）40頁。

6) 第6回帝国国会衆議院議事速記録第1号7頁。

[査定委員⑮]



河島 醇

かわしま・あつし (1847-1911)
河野弘善「河島醇伝——日本勧業銀行初代総裁」
(河島醇伝刊行会、1981年) 口絵写真より

1 | 「神鞭」なる名字は珍しいが元姓は「鞭」、先祖は物部氏で、麿子親王（用明天皇の皇子、聖徳太子の異母弟）の丹後征討（=大江山の鬼退治）の際、親王より薬師の仏像と南天燭の鞭を下賜され、以来鞭氏を称し南天を紋にして丹後に留まった家系⁷⁾。父・鞭重蔵の代には宮津藩下で縮緬商を営んでおり、その長男として嘉永元年8月4日丹後国与謝郡石川村に生まれる。幼名は重太郎、後に泰一郎。安政元年事業に失敗した父に従い京都に出て、安政6年呉服商の丁稚となった後、元治元年蘭医・新宮涼閣の許で働きながら蘭学を学び、神山鳳陽に就いて漢学を修め塾頭まで昇る。だが、その後父を助けて生糸店の店員となり、さらに明治2年郷里・石川村の神宮寺の別当職に就いた際、旧慣に従い寺号を姓に冠して「神宮寺鞭」の家を新たに興し、一方「鞭」家は弟・政三郎が嗣いだ。「神鞭」の姓は、神宮寺鞭を略したとも、恩師・神山鳳陽より一字取ったともいわれる。

2 | 明治2年宮津藩の宣教掛に任ぜられ、翌3年1月准権大属に進み東京出張となるも、7月に職を辞し、英語を何礼之、翌4年から本間七郎がのりゆきの勸学義塾に学ぶ。翌5年星亨よりブラックストーン『英国法律全書』の翻訳⁸⁾の校正を依頼され、星の家に寄宿し、自ら同書の翻訳も担当。

明治6年2月横浜税関次長となった星に従い、8月大蔵省租税寮十一等出仕。翌7年7月星が税関から大蔵本省（租税寮外事課長）に転じた後は、内務省勧業寮権頭・河瀬秀治の引きで11月内務省勧業寮に転じ、12月米国派遣決定、翌8年2月渡米、翌9年3月にはフィラデルフィア博覧会御用掛となるも、宴席で副総裁・西郷従道と議論の末コップを西郷に投じて酒を浴びせかけニューヨークに帰るなど衝突して、9月交替帰朝命令、翌10年2月帰国して内務省一等属。翌11年8月茨城県士族・来次伝四郎の四女・マキ子と結婚。

その後大蔵省に転じた河瀬に従い明治12年1月大蔵省一等属、7月には大蔵権少書記官、13年3月大蔵省議案局（兼任）、14年2月横浜正金銀行管理掛（兼任）、4月農商務権少書記官（兼任）、8月には大蔵少書記官兼農商務少書記官、11月大蔵省報告課長、翌15年6月議案局、9月参事院員外議官補（兼任）等を経て、明治17年5月大蔵権大書記官、18年6月主税

局会計課長、19年3月主税局次長を最後に、翌20年12月非職（23年12月非職満期）。

3 | 官途に見切りをつけた神鞭は、明治23年第1回総選挙より衆議院議員に転身。26年10月には大井憲太郎・安部井磐根らと大日本協会を結成し、第5議会で条約励行建議案・千島艦事件弾劾上奏案を提出。法典調査会の査定委員に任命されるも2日で辞めてしまうのは、その直前期であり（同年7月3～5日）、おそらく条約改正絡みの辞退なのだろう。一方、日清戦争開戦後の27年9月第4回総選挙では当選辞退。その後、29年9月成立の松隈内閣は、民間から神鞭を法制局長官、高橋健三を内閣書記官長に登用（高橋の任用は陸羯南の推挙とされるが、神鞭についても同様か）。翌30年1月20日法制局長官の職務柄再び法典調査会委員となるが、閣内の薩派と大隈派の調停者の役割を担っていた

高橋と神鞭は、松方首相の弱腰に愛想を尽かして相次いで辞表を叩きつけ（神鞭の辞職は10月28日。後任長官は梅謙次郎、これに伴い法典調査会委員も同日罷免）。

4 | 翌明治31年3月第5回総選挙に再び出馬、6月合同の憲政党に参加、隈板内閣で梅の後を襲って再び法制局長官（7月28日から内閣瓦解の11月8日まで）、その後は憲政本党に

属し、明治35年第7回総選挙で落選するも、明治37年第9回総選挙まで当選。その間、明治33年には国民同盟会、36年には対露同志会を組織。明治37年日露開戦後の4月視察で渡った韓国で咯血し5月に帰国入院するも6月21日死去。

5 | 愛妻家で新婚時代は内務省内規に逆らってまで宿直を断固拒否。一方、才色兼備の娘に殺到した嫁入り話に対し、明治の正規教育下で「洋学を修めた陶淵明」でなければ嫁にやらないと答えたのは、かつて官途での出世を諦めた苦い思い出に由来するのだろうか。

7) 神鞭の履歴については、橋本五雄（編）『謝海言行録』（1909年……〔復刻〕『伝記叢書45』（大空社、1988年））1頁以下に従った。なお、秦郁彦（編）『日本近現代人物履歴事典』（東京大学出版会、2002年）211～212頁の記述には、『謝海言行録』と異なる個所がある。

8) 貌刺屈斯的（ウヰルリヤム・ブラックストラン）（著）＝星亨（訳）『英国法律全書』全6冊（東京・袋屋亀次郎等、1873～1878年）。

査定委員⑯



神鞭知常

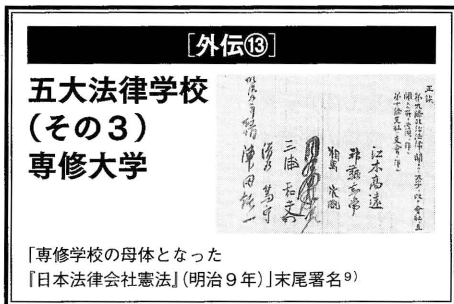
こうむち・ともつね (1848-1905)
『謝海言行録』（大空社、1988年）口絵写真より。

1 | 「五大法律学校」の中味につき、本連載では明治19年8月25日「私立法律学校特別監督条規」に基づき同年12月2日に特別監督校に指定された5校を念頭に置いているが、これは単なる主観的な「決め」の問題にすぎない¹⁰⁾。一方、誰をもって創立者をするかに関しても、明治大学や中央大学は、設立願に名を連ねた者全員を創立者とするのに対して、専修大学の正史は、明治13年8月7日提出の開業上申書記載の8名(下図で網掛けを施した者)のうち、(A)相馬・目賀田・田尻・駒井の4人を創立者とする一方、(B)「創立者に準ずべき人々」として津田・鳩山・江木を挙げ、また「江木・津田らとともに、専修学校設立の企画を助けた人物」として神鞭の名を挙げている¹¹⁾。

2 | 彼らはいずれも明治初年に渡米し親交を結んだ仲良しグループで、①彼らが明治8年12月ニューヨークで始めた法律研究サークル(翌明治9年5月26日「憲法」(=定款)1条により社(団)名を「日本法律会社」と定めた)が、②帰国メンバーにより設立された東京支部にやがて本拠を移し(11年3月移転決定)、③慶応義塾(福沢諭吉)に夜間法律科(12年12月)、三漢塾(箕作秋坪)に法律経済科(13年1月)を開設した後、④明治13年4月高橋・山下らの東京攻法館の教育部門を取り込み東京法学会に拡大改組して、⑤明治13年9月に新規開校したのが専修学校であった。

3 | 上記①の法律サークルは、江木が明治7年より在籍するコロンビア大学に翌8年相馬・鳩山・清水の3

人が入学して始まった。もっとも、清水は御三卿・清水徳川家7代目当主なので、学校設立のため汗を流すような人ではない。これに対して、江木と神鞭は、帰国後②の東京支部の運営に積極的に関与した。だが、江木は、神鞭も携わったフィラデルフィア博覧会の出品物資の処分につき不正の噂を流布され、学校設立直前の明治13年6月6日自死をもって抗議する(享年32歳)。一方、帰国の遅い鳩山は、設立願への署名には間に合わなかったが、開校当初より講師に名を連ね、また明治15年には実兄・小川盛重を校主に据えている。菊池武夫・小村寿太郎・斎藤修一郎ら開成学校の同期留学組と距離を置く鳩山にとって、このグループは心の拠り所だったろう。津田は、明治9年12月より法律サークルに入会し、帰国後は江木・神鞭と東京支部を支え、また慶応義塾夜間法律科開設の労を執った。



「専修学校の母体となった『日本法律会社憲法』(明治9年)末尾署名⁹⁾

	氏名	生没年(西暦)	渡米	留学先等	帰国
A	相馬永胤	1850-1924	4.7	8-10 コロンビア大学 10-12 エール大学院	12.9
	目賀田種太郎	1853-1926	3.9	5-7 ハーバード大学	7.8
			8.7	(文部省・留学生監督)	12.9
	田尻稻次郎	1850-1923	3.12	7-10 エール大学 10-12 エール大学院	12.8
	駒井重格	1852-1901	7.11	10-12 ラトガース大学	12.8
B	津田純一	1850-1924	4.12	8-9 エール大学 9-10 ミシガン大学	11.6
	鳩山和夫	1856-1911	8.7	8-10 コロンビア大学 10-13 エール大学院	13.8
			3.8	(華頂宮博経親王随員)	6.9
	江木高遠	1849-1880	7.	7-9 コロンビア大学	9.7
			13.3	(外務省・一等書記官)	-
			8.2	(内務省・博覧会御用掛)	10.2
清水篤守	1856-1924	4.5	8-10 コロンビア大学	10.7	
金子堅太郎	1853-1942	4.11	9-11 ハーバード大学	11.9	
C	高橋一勝	1853-1886	-	-	-
	山下雄太郎	1856-?	-	-	-

4 | これに対して、高橋・山下につき、専修大学の正史は「この二人はまもなく去って他に行ったから、……創立者のうちに数えるのは適当ではない」とする¹²⁾。外伝⑨「中央大学」で述べたように、彼ら東大卒・東京攻法館の代言人グループは、明

治17年増島六一郎の帰国後、新たな法律学校の設立へと向かうのである。一方、金子堅太郎も「専修学校の創立者の一人、と解するのは適当ではない」とされる。慶応義塾夜間法律科の講師を務め、校舎に由利公正の邸宅借り受けの手はずを整え、明治13年8月7日開業上申書に署名押印したにもかかわらず、翌9月16日に教員辞退届を出して離脱したからである。その後、金子は、太政官大書記官時代の明治18年10月「北海道三県巡視復命書」で札幌農学校を廃校の危機に陥れ、明治26年6月には校長を務める日本法律学校の廃校を決議している。教育関係とはよほど相性の悪い人と見ゆる。

9) 写真・説明文とも『専修大学125年』(専修大学、2005年)23頁。署名は、右から、江木高遠・神鞭知常・相馬永胤・目賀田種太郎・三浦〔鳩山〕和夫・清水篤守・津田純一。

10) 詳細については、高梨公之「五大法律学校物語(1)～(8・完)」本誌240～247号(1975～1976年)参照。

11) 『専修大学百年史(上巻)』(専修大学、1981年)34頁、64～65頁。

12) 前掲注11) 149頁。(しちのへ・かつひこ)